

高校生の登山のあり方等に関する検討委員会

那須雪崩生徒遺族
奥 公輝の父 奥 勝

山岳部の活動は、学校管理下の活動として ふさわしいものなのでしょうか？

高校の山岳部の活動は、学校管理下での活動としては特殊なものです。

山岳部の活動の安全性は顧問教員の力量に掛かっており、主な活動である登山は外部の目が届かない場所で実施されています。他の部活動ではそのようなことはありません。他の部活動では顧問教員が変わったからといって安全性が大きく変わることもなく、グラウンドや体育館などの学校内で、父兄や他の教員の目の届くところで実施されています。

そのような特殊性に目が向けられることもなく、山岳部の活動は、那須雪崩事故の後でも全国の高校で変わらず続けられています。栃木県でも「子どもたちを山から遠ざけてしまっはいけない」との言葉の下、継続するかどうかの議論もないまま山岳部の活動が認められています。

学校管理下の活動としての山岳部の特殊性から目を背け、議論なく無条件で山岳部の活動を認めてよいものなのでしょうか？

私は無条件で認めてしまうのは、おかしいのではないかとずっと感じています。

まず、山岳部の活動の特殊性を認め、学校管理下の活動として山岳部の活動がふさわしいかどうか議論すべきだと考えます。そして、今後も山岳部の活動を実施するつもりであれば、山岳部の活動の特殊性を可能な限り排除し、学校管理下での活動にふさわしいものとする努力をすべきだと考えます。

山岳部の活動の特殊性とは

学校管理下で実施する活動として、山岳部の活動は特殊であるとする理由はいくつか挙げられます。

以下に主なものを3つ挙げさせていただきます。

➤ 安全性が顧問教員の技量に委ねられている

現状の山岳部の安全性は、顧問教員の技量に委ねられています。登山の安全に関する知識をもち、高い安全意識を持った経験豊富な顧問教員が引率した場合には安全性は高まります。しかし、知識もなく安全意識の低い顧問教員が引率した場合には危険な行動をしがちで、安全性は低下してしまいます。

顧問教員の技量によって安全性が変わる部活動なんて、学校管理下の活動としてはおかしいのではないのでしょうか？

高い力量をもった顧問が他校に転出し、登山の経験のない教員が顧問となったために安全性が低下し、事故が発生してしまったなんてことはあってはならないことです。他の部活動で強豪校の指導力のある顧問教員が他校に転出し、その学校の野球やサッカーなどのチームが弱体化してしまったとかはよく聞く話ですが、それとは話のレベルが違います。

また、那須雪崩事故を引き起こした教員らは、30年程度の登山経験があり、教員としてはかなりの技量があるように思えます。それでもこのような事故を引き起こしているのですから、登山の専門家ではない教員が登山を引率すること自体に無理があるように思えます。

栃木県教育委員会の再発防止策では、顧問教員に登山に関する研修を受けさせ、安全性を高める対策が打ち出されています。それはそれで結構なことではありますが、一介の教員がどこまで知識や経験を高めることができるのか、本職である教育をそっこのけで登山の技術を高める必然性があるのか疑問が残ります。

➤ 外部の目が届かない

山岳部の活動は、山に登ることであり、学校外の活動がほとんどです。

当然ですが、保護者の目がそこに届くことはありません。言われなければどんな危険な場所に行ったのかもわかりません。事故に遭ったとしても、教員の腹積もりによってその事故を隠ぺいすることだって可能です。

事実、那須雪崩事故の7年前に発生した雪崩事故は、教員らの判断によってかん口令が敷かれ、事故は隠ぺいされてしまいました。そして、那須雪崩事故は、30cmを超える積雪がある中、雪中歩行訓練が実施され、危険な斜面に足を踏み入れて事故は発生しました。

事故当日は、もう4月になろうとしている時期なのに平地でも雪が降る異常な天候でした。こんな異常な天候の中、私は訓練が実施されているなんて夢にも思っていませんでした。

このような隠ぺいや無謀な行動は、山岳部の活動が外部の目が届かない中で実施され、顧問教員らが外部の目を気にすることなく好き勝手なことをできたため起こってしまったのだと思います。

➤ 救護の手が届かない

事故があっても助けに行ったり救急車をすぐに寄こしたりできない点も特殊です。

他の部活動であってもケガや熱中症、突然の心肺停止になったりすることもあるかと思えます。しかし、ほぼすべての活動が校内で実施されているため、校内の救護教諭やAEDによる処置が可能であり、救急車を呼ぶこともでき、迅速に対応することができます。

那須雪崩事故では雪崩に埋まった息子たちが雪から掘り出されたのは、事故後3時間経った後でした。病院に運ばれるまでは8時間掛かりました。事故現場は救急車が近づける場所ではなく、近辺にドクターヘリが発着できる場所もありませんでした。

また、他県ではありますが今年の8月に学校行事で富士山に登山していた高校教員が休憩中に意識を失い、死亡した事故がありました。意識を失った原因は定かではありませんが、山で起きた事故でなければ迅速に救助でき、救命できた可能性があったのではないのでしょうか。

特殊性を排除する努力を続けるべき

学校管理下での活動として、山岳部の活動にはここまで述べたような特殊性があることを認めなければいけません。

そして、顧問教員の力量によらず一定の安全性を確保し、山岳部の活動をオープンに公開して外部の目を入れ、事故が遭った場合に迅速に対処できるようにするにはどうすべきか考えなければいけません。

しかし、それでもこれらの特殊性を100%排除することはできないでしょう。そうであったとしても、山岳部の活動を今後も継続して実施するつもりなのであれば、これらの特殊性を排除する努力を続け、今後も終わりなくその努力を継続していかなければなりません。

学校管理下での活動としての特殊性を排除するそういった努力がない限り、山岳部はもはや存続すべきでないと考えます。

死ぬかもしれない覚悟が必要なのか？

上記のような意見に、登山アドバイザーの派遣を必須にすることで教員の力量に頼らない安全性の確保をすべきではないかなど、自分なりの対策案を加えてインターネット上で意見表明いたしました(<https://nasu0327.com/2019/10/5397/>)。その意見に対し、一般の方々から賛否両論のいろいろなご意見を頂くことができました。

その中で「山岳部に入った以上、死ぬかもしれないということを覚悟すべきではないだろうか」といった意見もいくつか見受けられました。そのような意見は登山経験の長い大人には見られず、むしろ登山経験の短い現役の高校生の山岳部員や若い方の中に見られ、その点が意外な気がしました。

うちの息子はそのような死ぬかもしれないといった覚悟は持ち合わせていなかったと思います。もちろん親である私もそのような覚悟は持ち合わせてはいませんでした。息子はどちらかと言うと山に登ることより自然の中でキャンプをすることの方に興味を持っているように思えました。登山から帰っても山に登ったことより、テントの中で先輩たちとどんな話をしたのかとかそういったことを話してくれました。

山岳関係者に言わせると、そのような軽い動機で山岳部に入るなんて、覚悟が足りなかったのではないと言われるのかもしれませんが。安易に山岳部に参加させることを許可した私たち親も責められるべきかもしれません。

しかし、学校管理下で実施される活動に対して、死ぬかもしれないといった覚悟までが必要なのでしょうか？

「春山安全登山講習会」という、「安全」の名がつく「講習会」に参加し、講師である教員の指示に従い、息子たちは命を奪われました。安全であるはずの講習会で指示に従っただけの息子たちや、事故によって死より厳しい試練を与えられた私たち親に、覚悟が足りなかったなどと誰が言えるのでしょうか？

今後も死ぬかもしれない覚悟が必要であり、若い現役の部員にそのようなことを言わせてしまうような山岳部であるならば、即刻廃止していただきたいと願います。

山岳部の永続性

栃木県教育委員会から事故後に打ち出された対策は、相変わらず顧問教員を登山の研修漬けにし、山岳部の活動を顧問教員の技量に頼ったものとしているように思えます。

今年の栃木県の山岳部のインターハイ予選は、参加校が以前と比較してかなり減少していました。事故後、顧問を続けることに疑問を持った教員が増え、顧問の引き受け手がなくなったため廃部となった学校がいくつかあったことが原因と聞いています。

顧問教員の技量に頼った山岳部の活動とし、過大な責任を顧問教員に負わせている現状では、教員が顧問を続けることに疑問をもってしまうことは必然であろうと思います。このままでは山岳部の活動は衰退してしまうのではないのでしょうか。

私は息子が所属した山岳部の活動が永続的に続くことを願っています。

しかし、一方で山岳部の活動が顧問教員の技量に頼ったもののみであるのならば、このまま山岳部の活動が衰退してもらっても一向に構わないと思います。

山岳部の活動を永続的なものとしようとするならば、意識を変え、山岳部の活動の特殊性を排除し、学校管理下の活動としてふさわしいものとするべきであると考えます。

- 何故どうしてこうなったのか、どうすべきなのか……そういった事に目を向けられないなら、素人考えで運営される山岳部は害悪になると思っています。
- 日本の部活動の問題。登山に限らず、素人が名ばかり顧問をしている・させられている問題でしょう。
- 学校は部活動をやめて、授業が終わったら生徒を社会に解放したらいいと思うよ。地元のクラブで年齢差ある人と付き合うのは、とてもいい勉強になると思うし、学校に縛るから反抗もするもんだ
- 教員だけに任せて学校管理下に置くから無理が生じる。外部の団体と合流して山を学ぶ機会を継続的に設けるべきでは。
- 熱心で専門的な知識と経験を持った先生が他校に異動になった時「じゃあ廃部ね」とできれば良いけど、結局別な先生が生徒の命を預かる羽目になる事が多そう。
- 山岳部の特殊性として挙げられている3つの要因のうち、「外部の目が届かない」と「救護の手が届かない」の2つは、山に登る以上は対処のしようがないので、特殊性を排除する＝山岳部を廃部にする事と同義になる
- 高校山岳部の是非を問うというより、「お前らは信用ならないし、そんな人が息子・娘を率いて人目の付かない処で危ないことをやってるのがダメ」ということをオブラートに包んで理屈をつけた感じかな。山の話で、信用ならないと言われたらそれまで。
- そもそも登山自体、対人スポーツではなく大自然を相手にしているから、何が起こるかわからない。もちろん死亡事故だってあり得る。山岳部に入った以上、死ぬかもしれないということを覚悟すべきではないだろうか。
- そもそも顧問に事故の責任を全て押し付けるのはおかしいのではないか。顧問が連れていっている。生徒が連れていってもらってるというその発想がおかしいのではないかと思ってしまう。
- 高校に山岳部は、いらないと思う。同僚にも「専門」の山岳部顧問と未経験の顧問がいるが、生徒や本人がスズメバチに刺されたり、滑落しかけたり、まさに命がけで引率している。